

西上免遺跡

調査の経過 西上免遺跡は弥生時代から鎌倉時代の遺物散布地として県遺跡番号0701として登録されている。行政的には一宮市今伊勢町馬寄および尾西市開明に所在する。90年度から継続調査を実施し、弥生中期から室町時代にかけての遺構が検出された。今年度も6～7月に東海北陸自動車道建設予定地内で、91年度調査区の南側550㎡を調査した。

遺構と遺物 現況は標高約6.4mの水田で、調査区北半では厚さ25cmの耕作土層直下から基盤層である灰色シルト層が現れ、これを掘りこんで遺構が存在する。主要な遺構は次のとおりである。

古墳時代初頭：墳丘墓 S Z 01・02、溝 S D 12（墳丘墓の周溝かと考えられる）

鎌倉・室町時代：溝 S D 04（S D 03の下層に部分的に残存する）、土坑 S K 02

戦国時代から江戸時代前期：溝 S D 03

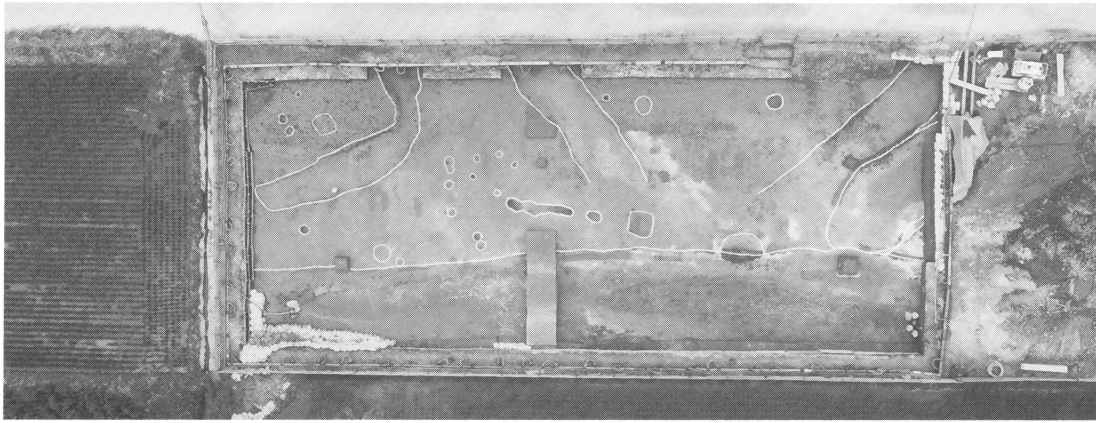
江戸時代中期から明治初期：溝 S D 02と杭列

S Z 01は、確認した周溝が91 A区の溝（S X 01）と対応しており、一辺の溝の中央に開口部をもち開口部周辺の溝幅が拡張する広義の前方後方型墳丘墓と推定される。周溝からは、S字甕や精緻なつくりをした小型高杯、ほぼ完器に復元できるパレス壺も出土している。S Z 02は、他の二辺の溝は確認できないが、おそらくは一隅に開口部をもつ墳丘墓と推定される。周溝からはパレス壺と、その近くから20cm角の方形の石が出土している。二体のパレス壺はともに、波線文と赤彩とが施されているが、口縁部が普通に見られるものとは異なっている。

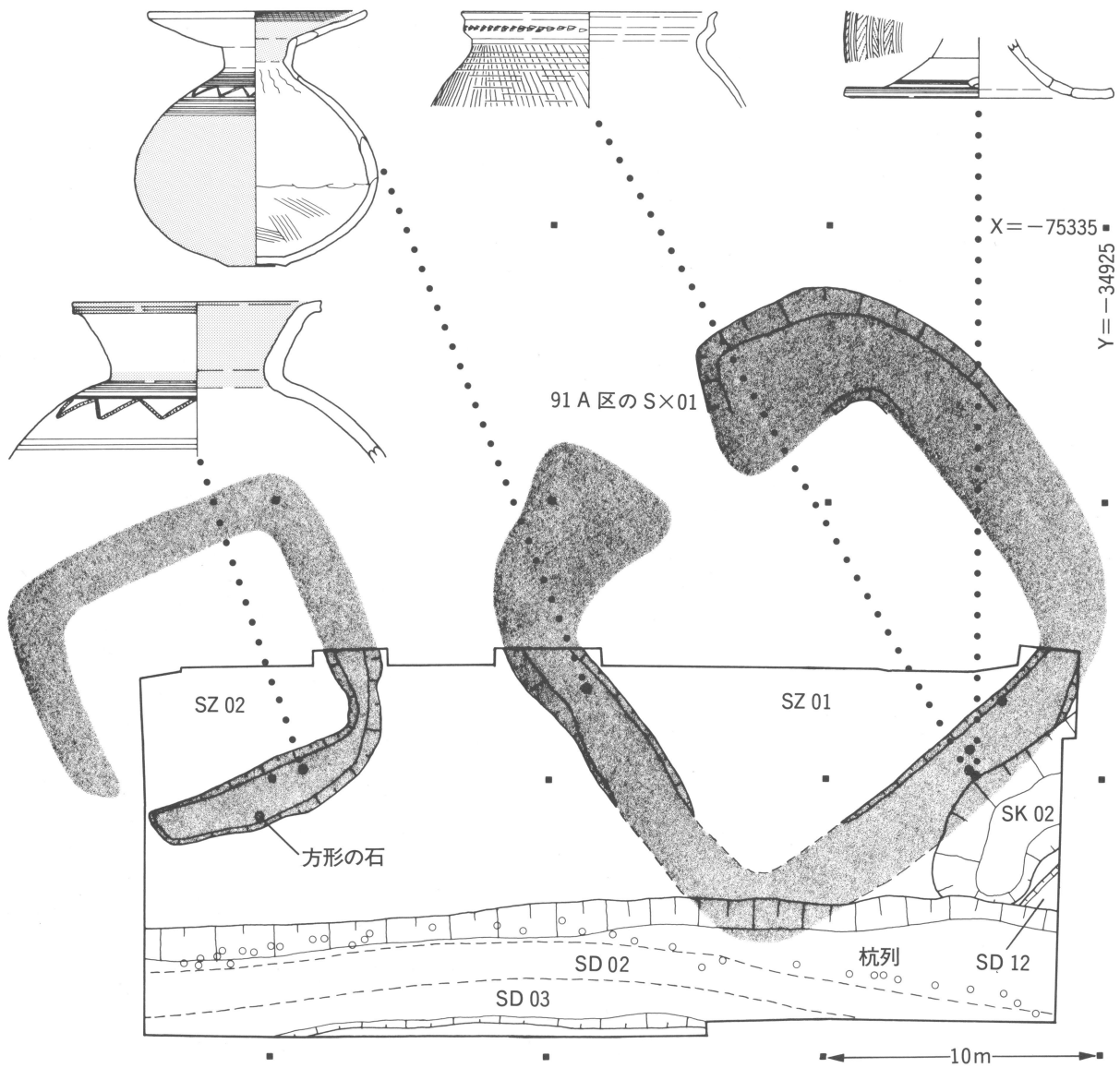
S D 02・03・04は東から西に向けて流れており、鎌倉時代から明治初期まで流路を多少変遷させながらもほぼこの場所に存続した溝と考えられる。明治17年頃の地籍図や天保年間（1830～1844）の村絵図に見られるものであろう。S D 03は幅4.5m、深さ0.65mで、多くの中・近世遺物が出土している。S D 02は幅2m、深さ0.5mで箱型の断面であり、北側に護岸のための杭列をもち、また、埋土から人為的に埋められた様子がうかがえる。（今西康二）



第1図 調査区位置図（1：5000）



調査区全景



第2図 主要遺構と出土遺物 (1 : 250、遺物は 1 : 4)